東大の良問10に学ぶ世界史の思考法

相生昌悟

監修 西岡壱誠

東大ならではの視点で語られる「歴史の流れ」とは!?

東大模試全国1位の東大生が徹底解説!

東大の良問10に学ぶ世界史の思考法

相生昌悟

監修 西岡壱誠

星海社

270

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

皆さんは、世界史の勉強に対してどんなイメージを持っていますか？「年号や人名を暗記しないといけなくて大変」「何百年も前の出来事について勉強したところで役に立たない」と思っている方も、中にはいるかもしれません。

しかし、世界史は、狭い特定分野の知識の暗記が問われるようなつまらないものではありませんし、まして役に立たないなどということもありません。むしろ、私たちの「先輩」にあたる歴史上の人々が作り上げてきたユニークなストーリーを学べて、しかも現代にも応用できるところがあるのが世界史です。

そんな世界史の面白さをダイレクトに感じるのに、うってつけの題材があります。それが、東京大学の入試問題です。東大は、そのアドミッション・ポリシー（大学側がどのような学生を求めるかをまとめたもの）において、「知識を詰めこむことよりも、持っている知識を関連づけて解を導く能力の高さを重視します」と述べています。東大は、大量の暗記で

はなく、むしろ必要最低限の知識から論理的に考えることを求めているのです。そんな東大が作る問題には、東大の先生方が描く歴史のストーリーや捉え方が詰まっています。つまり、東大の入試問題を通して世界史を学ぶことで、確かな歴史観を養いつつ、必要な知識を自分なりに結びつけていく思考法を身につけることができるのです。

中でも、東大「らしさ」が出ているのが、東大世界史の第1問、通称「大論述」です。600文字程度の論述問題は、多くの受験生にとって超えなければならない高い壁であると同時に、東大の歴史観が詰まった最高の題材でもあります。本書は、この大論述のうち、世界史のほぼ全時代を幅広く学ぶために特に重要だと考えた10問を使って「世界史の思考法」を学んでいくものです。

こうやって聞くと、「いきなり入試問題、それも東大のものを使っても、どうせ分からなくて挫折してしまうよ」と思う方もいるかもしれません。しかし、知識は使い方まで知ってこそ活かせるようになるものです。なんとなくテキストを読むよりも、「この問題に答えるにはどんな知識や思考法が必要だろう?」と考えながら学ぶことで、知識がより実践的なものになります。まして、今回用いる題材は東大の入試問題です。たしかに生易しいものではありませんが、その分じっくり噛みしめながら扱うだけの深みと面白さを備えてい

ます。東大の問題は、世界史を初めて学ぶ人にも、世界史の骨格が頭に入っている人にも、それぞれ示唆を与えてくれるはずでしょう。

ここで、東大がある年の入試問題に合わせて示した「出題の意図」を一部引用します。

「解答に際しては、問題文をしっかりと読み、そこに書かれている出題意図をまずは文字通り理解し、与えられた問いについて何が問われているのかを考え、導き出した答えを、指示された場所に、指示通りの様式で記して答案を作成することが求められています。この当たり前とも思えることをしっかりやることが大切と考えます」

東大は、なにも高尚・高度な知識や技術を要求しているわけではありません。むしろ、「問いに正面から答える」という、ごくごく当たり前のことが求められています。「世界史の思考法」も、結局はこうした読解力と素直さに尽きると言ってよいでしょう。東大の問題をじっくり読んで、東大が何を考えてほしいと思っているのかを受け取り、それに沿ってインプット・アウトプットすることを通して、着実に世界史を学んでいきましょう。本書が、「世界史の思考法」を養い、その先に世界史の「頂」を望むようになるための道しる

べとしての役割を担えたら幸いです。

自己紹介が遅れましたが、私は相生昌悟と申します。地方の公立高校を卒業したのち、東京大学に進学しました。現在は法学部にて法学・政治学を学ぶ傍ら、出版活動や高校でのコーチング活動をしています。

私が本書を執筆しようと考えたのは、東大世界史を題材とする既存の書籍において、問題文をしっかり読み、そこに秘められた東大の歴史観を理解した上で適切な答えを導くということができていないように感じていたからです。既存の書籍における問題の取り組み方といえば、問題文をとりあえず流し読みだけして、ただ問題に関連する単語を解答に書き並べるというものに過ぎない。だからこそ、東大世界史にきちんと向き合っていると言える書籍を作りたい。そう考えました。

本書の監修でもある株式会社カルペ・ディエムの西岡壱誠氏（以下、日頃の敬意よりあえて「西岡さん」とお呼びします）には、本書の刊行に至るまでの長期間にわたって大変お世話になりました。東大入学以来の構想をこうして書籍の形で実現できたのは、西岡さんが僕の想いを応援し続けてくださったおかげです。西岡さん、最後までやり遂げさせていた

だきありがとうございました。

また、本書が幸運にも星海社新書として刊行の機会を得ることができたのは、担当編集者の片倉直弥さまのお力添えによります。稚拙な草稿を粘り強くお読みいただき、多くのアドバイスをくださったことで、こうして形にすることができました。

さらに、本書の執筆全体を通しては、私と同じ東大法学部の加藤友樹君をはじめとする友人たちに多くの助力を受けました。問題の読解や解答例の検討にあたって何度も繰り返したあの議論がなければ、本書はあり得ませんでした。本当にありがとう。

本書の構成

本書は、「講義編」「演習編」「章のまとめ（解答例）」の3部構成になっています。

講義編は、世界史を初めて学ぶ人や、久しぶりに学び直す人向けに、最低限必要な知識を解説するパートです。初学者でも読みやすいように、年号や固有名詞などは極力少なくしてあります。すでに世界史を学んだことのある人や、今しっかり学んでいる最中の受験生などは飛ばしてＯＫです。

演習編は、東大の問題文の精緻な読解による「枠組み」や「思考法」の確定と、そこへ

の具体的知識等の当てはめ（解説）の2段階からなるパートです。東大が1年に1問だけ出題する大論述を通して「世界史の思考法」を学ぶためには、問題文の精緻な読解が欠かせません。本書は（東大入試を扱った類書には例を見ないほど）相当に力を入れて、このパートを準備しました。

章のまとめ（解答例）は、問題への解答であるのみならず、各章のまとめ・要約にもなっています。ここだけを読んでも、東大の歴史観を大まかにつかめるようになっています。本書では、東大からの問いに正面から答えるべく、より良い解答例の作成に最大限尽力しました。とはいえ、当然ながら、本書の解答例が全て一点の曇りもないとまでは言えません。東大からの問いへの答えになっているか、世界史の「まとめ」として堪えるものになっているか、批判的に検討していただけたら幸いです。

主な参考文献・凡例

各章末で紹介した参考文献の他、本書全体を通して参照した文献は以下のとおりです。なお、歴史の流れの理解に資する箇所や、一般にはあまり有名でない考え方・事例等について紹介する際には、以下に示す凡例に従って教科書の参考箇所を示しています。

木村ほか編『詳説世界史』（山川出版社、２０２３）→山川・詳説
羽田ほか『新世界史』（山川出版社、２０２３）→山川・新
川島ほか『世界史探究』（東京書籍、２０２３）→東京
桃木ほか『新詳 世界史探究』（帝国書院、２０２３）→帝国
木畑ほか『世界史探究』（実教出版、２０２３）→実教
秋田茂ほか『高等学校 世界史探究』（第一学習社、２０２３）→第一
岸本美緒＝鈴木淳編『歴史総合』（山川出版社、２０２２）→山川・総合
川島真ほか編『詳解歴史総合』（東京書籍、２０２２）→東京・総合
木村靖二ほか編『詳説世界史研究』（山川出版社、２０１７）
大阪大学歴史教育研究会編『市民のための世界史』（大阪大学出版会、２０１４）
全国歴史教育研究協議会編『世界史用語集 改訂版』（山川出版社、２０１８）

目次

はじめに 3

第1章 ローマ・中国における「古代帝国」成立までの経緯 27

講義編 28

文明は4つの河川のほとりから誕生した 28
やがてヨーロッパを牛耳ることになる「ローマ」が登場 30
ローマの重要な伝統だった「共和政」に見えはじめた陰り 31
ローマに現れた2人のカリスマ 32
中国文明の興った地でも動きあり 33
「始皇帝」が治める帝国が誕生 35
2つの帝国誕生の経緯は似ている？ 35

演習編 37

読解 38

演習編のはじめに　〜東大世界史の第一歩〜 38
「古代帝国」が成立したのはいつなのか？ 39
「帝国」は「法則的な発展」を遂げてきた？ 40
統治者の呼び名の登場は、統治の完了、すなわち「帝国」の成立と一致 42
法則的な発展を理解した上で、そこからはみ出した部分を押さえるべし 42

解説 43

都市国家的性格を失っていったローマ 43
カエサルが準備し、オクタウィアヌスが完成させたローマ「帝国」 46
実力本位の傾向が進み、領域国家が各地に生まれた黄河・長江流域 48

◎第1章のまとめ（解答例） 51
参考文献 52

第2章 中世地中海世界の3つの文化圏 55

講義編 56

たけき者、ローマ帝国もついには滅びぬ 57
東ローマ帝国はしぶとく生き残り、独自の文化を形成 58
西側のローマ帝国も負けじと「復活」を遂げる 59
「新興勢力」たるイスラームが中東で勢力を拡大 61

演習編 62

読解 63

地中海に成立した3つの文化圏 63
地中海を巡って繰り広げられた勢力争いが、やがて文化圏を作り出す 65
文化圏を特徴づける要素とは？ 66

解説 68

征服者ゲルマン人と、その中で被征服者ローマ人たちの支持を得た勢力 68

生き延びた東ローマ帝国も、新興勢力との争いの中でその様相を変えていく 70
拡大する一方で内部に問題が生じていたイスラーム勢力 71
「キリスト教」の間にも葛藤あり 73
そして3文化圏並存へ 74

◎第2章のまとめ（解答例） 75
参考文献 77

第3章 11世紀から19世紀までに生じた農業生産の変化とその意義 79

講義編 80
農業生産が変化すると何が起こる？ 81
かの有名な「十字軍」は農業生産の変化が原因だった!? 82
十字軍とアジアの潮流が結びつき、ユーラシア大陸全体に及ぶ交易網が完成 83

アジアの発展が再び西洋を引きつけた 85
イギリスで始まった三圃制の「進化系」が産業革命を導く 85

演習編 88

読解 89

時代が広範囲に渡るゆえ、メリハリをつけて検討すべし 89
農業生産の変化がもたらしたもの 90

解説 92

東アジアとヨーロッパ、それぞれの発展が農業を起点に結び付けられる 92
東西を結ぶ大帝国・モンゴルが出現するも、14世紀の危機により一度リセット 93
世界規模の交易が復活するも、再びの危機によって停止される 94
パクス・ブリタニカによって国際分業体制が確立する 96

◎第3章のまとめ（解答例） 98

参考文献 99

第4章 パクス・ブリタニカへの組み込まれと対抗 101

講義編 102

世界のトップに立ったイギリスがもたらした「平和」 102
ライバルに勝利したイギリスが、覇権国家への道を歩みはじめる 103
イギリスの勝因は「カネ」と「軍事」にあり 104
イギリスを押し上げたのは3つの「革命」 106
イギリスへの対応を迫られた世界各国 108

演習編 110

読解 111

「きっかけ」となったパクス・ブリタニカ 111
『米欧回覧実記』が引用された意味 112
イギリスに組み込まれたり対抗したりした「諸地域」とは？ 114

解説 115
「世界の工場」に組み込まれた世界の諸地域 115
「対抗」には2パターン存在する 116
イギリスを追いかけ成功した後発資本主義国 118
イギリスに上手く対抗しきれなかった商品市場・原料供給地 121
◎第4章のまとめ（解答例） 126
参考文献 127
第5章 ロシアの対外政策がユーラシアにもたらした変化 129
講義編 130
ロシアの対外的拡大は今も昔も起こっている 130
凍らない港を求め続けてきたロシア 131
ロシアの拡大に待ったをかけたイギリス 132

演習編 135

大戦争を機に、ロシアは「方針転換」133
ユーラシア大陸全域を舞台にした「ゲーム」が起きる 134

読解 136

ロシアの対外政策がもたらした「変化」136
ユーラシア大陸の歴史の「重要な鍵」を握ったロシアの動向 137
南下政策が引き起こした「摩擦」138

解説 140

ウィーン会議からしばらくは「憲兵」として秩序維持に貢献 140
ウィーン体制動揺の引き金ともなったロシア 142
ロシアが仕掛けたクリミア戦争でウィーン体制は完全崩壊 143
諦めの悪いロシアも、ついに方針転換を決意 145
中央アジアでイギリスと激しく対立 146
極東の地における対立が、後の日露戦争の引き金となった 147

◎第5章のまとめ（解答例） 151
参考文献 152

第6章 東アジアの伝統的な国際関係と近代におけるその変容 153

講義編 154
「中国」という名前自体に込められた意識 155
冊封・朝貢によって面子を保った中国と、それによって潤った周辺国 156
新たな秩序をもたらしたヨーロッパ列強 157

演習編 159

読解 161
史料の読み解きが試される 161
長きにわたって守られてきた伝統と、その変容 162

国際関係の「理念」と「現実」、両面に着目すべし 164
「東アジアの伝統的な国際関係」とはどんなもの？ 166
海賊の資金源を絶つべく、民間海上貿易を禁止 167
中国との関係をうまく利用した各国 168
理念面では対等な、ヨーロッパにおける近代的な関係 170
列強の進出もあって、伝統は徐々に変容を余儀なくされる 171
自分に「従属」してくれていた周辺国を切り崩される中国 172

解説 166

◎第6章のまとめ（解答例） 174
参考文献 175

第7章 近代ユーラシア・アメリカの政体変容 177

講義編 178

しばらくの間、世界を席巻した君主政 179
大西洋の周縁で連続的に起こった革命 180
第一次世界大戦が共和政の導入をさらに推し進めた 182

演習編 185

読解 186

世界全体における流れの整理が求められる 186
今回の問題を貫く軸は「政体変容」 188
地図が示されている意味を考えよう 189

解説 190

南北アメリカで一気に進んだ植民地の独立 190
共和政を樹立しても、国民の参加は限定的 192

多くが君主政を維持する中、特徴的な国も存在 193
成文憲法を制定しなかったイギリス、敗戦後に民主的憲法を制定したドイツ 194
数多くの独立国が成立した東欧と、他と一線を画したロシア 195
各々の道に進みはじめた東アジア 197

◎第7章のまとめ（解答例） 199
参考文献 200

第8章 男性中心の社会で活躍した女性と2つの運動 203

講義編 204
女性の偉人、何人思いつく？ 205
近代に至る歴史で、女性はどのような立場に置かれてきたか？ 206
政治に関わる権利を求め、女性が立ち上がる 208

演習編 211

参政権が与えられれば万事解決……とはいかず、根強く残った差別や抑圧 209

読解 212

東大の先生の思考回路をトレースしよう 212

男性中心の社会の中でも輝きを放った女性たち 214

19世紀から盛り上がった第1波フェミニズムで参政権を獲得 215

さらなる女性解放を求め、第2波フェミニズムが起こる 216

解説 217

欧米社会は、革命など大きな変革を経験したものの、女性は政治に参加できなかった 217

学問・芸術・社会活動のそれぞれで活躍した女性 219

家庭内と賃労働という2つの場所それぞれで女性が受けた差別 220

「19世紀を通じて高まりをみせ」、「男性の普通選挙要求とも並行して進められた」運動が、「19世紀末以降」に成果をあげた 221

「根強い社会的差別や抑圧からの解放を目指す運動」が繰り広げられるようになった 224

◎第8章のまとめ（解答例）226
参考文献 228

第9章 第二次世界大戦中に生じた出来事が、1950年代までの世界に与えた影響 229

講義編 230
そもそも第一次世界大戦はなぜ起こった？ 231
第一次の反省もむなしく、第二次大戦が起きてしまう 232
国際連盟の反省を生かして設立された国際連合 234
国際連合ができてめでたしめでたし……とはいかず 235

演習編 236

読解 237
現代世界に大きな影響を与えた第二次世界大戦 237

戦争には2つの側面がある 238
大戦中、すでに勝ったあとの話をしていた連合国 240
大戦後ただちに訪れたわけではなかった世界平和 242
ヨーロッパにおける東西対立の深化 243
直接的な対立が目立ったアジア圏 245

解説 240

◎**第9章のまとめ（解答例）** 247

参考文献 248

第10章 **1970年代後半から1980年代にかけての、東アジア、中東、中米・南米の政治状況の変化** 249

講義編 250

冷戦はどのように進んだか？ 250
長かった冷戦もようやく終結へ 252
冷戦終結が世界全体を新たな時代へ向かわせるきっかけとなった……かに見えた 253

演習編 255

読解 256

現代史の「分岐点」となった冷戦終結？ 256
冷戦終結は「世界史全体の」転換点たりえたか？ 257

解説 259

「自由民主主義」と「宗教・民族対立」が鍵となるポスト冷戦期の世界 259
自由民主主義が政治体制の基調となった 259
冷戦下で抑え込まれていた民族や宗教などをめぐる対立が顕在化した 261
民主化につながる動きが目立った中南米とアジア 262
経済成長・民主化を進めた東アジア諸国と「例外」 263
宗教・民族をめぐる「ほころび」が目立ちはじめた中東 264
そもそも「新冷戦」とはどんな時代だったか？ 266

◎第10章のまとめ（解答例） 267
参考文献 268

第1章

ローマ・中国における「古代帝国」成立までの経緯

講義編

文明は４つの河川のほとりから誕生した

本書が最初に扱うのは、世界史を学ぶ人がまず目にすることになる重要論点、「古代帝国」です。２つの古代帝国の共通点と相違点を問う２０１７年の東大世界史の問題を一緒に解いていきましょう。

といっても、いきなり６００字の大論述に向き合うのは大変です。そのため最初に講義編として、古代帝国についての予備知識を高校世界史レベルでざっくりと解説します。この講義編の知識を頭に入れることで、東大世界史の論述問題は基本的に解くことができます。

古代帝国の前に、まずは人類の文明が誕生してきた過程について、簡単にご紹介します。

「四大文明」という言葉は、まだ世界史に触れていない方でも聞いたことがあるでしょう。メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明・中国文明の4つです。

これらは全て、世界各地の大河のほとりに誕生しました。メソポタミア文明はティグリス・ユーフラテス川、エジプト文明はナイル川、インダス文明はインダス川、そして中国文明は黄河・長江に対応しています。

では、現代でも知られる古代の文明は、なぜ河川のほとりに誕生したのでしょうか？　実は、これらの河川は必ずしも超巨大な川というわけではありません。大きさだけで考えれば、アマゾン川やミシシッピ川など、世界にはまだまだ優秀な河川がたくさんあります。つまり、河川の大きさ自体は決定的な理由ではありません。

むしろ重要だと言われている要因の1つが、灌漑（かんがい）技術です。灌漑とは、河川や地下水などから農業に必要な水を引いてくることを言います。他にも、定期的な洪水によって肥沃な土を手に入れることのできた地域などもあります。ただ河川があるだけではなく、そこから水を持ってこられたり、農業に必要な栄養が手に入ったりしたからこそ、長きにわたって続く「古代文明」として現代まで名を馳せることができたのですね。

やがてヨーロッパを牛耳ることになる「ローマ」が登場

こうして古代文明が生まれてから数千年の時を経て、各地で特色のある国家が生まれてきます。その1つが、「都市国家」と呼ばれる形体の国家です。

西側で登場した都市国家として有名なのが、現在のイタリア周辺に登場したローマです。ラテン人の一派によって建て上げられたローマは、最初こそ一都市に過ぎない存在でしたが、周辺地域に何度も征服戦争を仕掛けては勝利を収め、その支配領域をどんどん拡大していきました。紀元前1世紀にはエジプトを征服して地中海を押さえ、1世紀後半にはかつてメソポタミア文明が栄えた地域までをも治めるようになります。

この時期には、地中海周辺に限ってもたくさんの都市国家が存在しました。では、なぜローマが特に発展することができたのでしょうか？　これもさまざまな説明ができますが、1つには「1を10にする力」に長けていたのが重要だと考えられます。ローマは、ローマ法などの法的システムが発達していたり、水道や街道などのインフラが整備されていたりと、ソフト・ハードの両面で洗練されたものを持っていました。しかし、これらは実はローマのオリジナルではありません。多くのものは、ギリシアなどの先人たちから学んできたものを改良しているのです。つまり、ローマの人々は、「1を10にする」のが非常に得意

だったからこそ発展することができたと言えるでしょう。

ローマの重要な伝統だった「共和政」に見えはじめた陰り

大きく繁栄したローマの重要な伝統であり、特徴でもあったのが「ローマ共和政」です。この共和政は、3つのアクターによって支えられていました。まず、絶対的な権限を持っていたのが、執政官と呼ばれる人々です。貴族から選挙で選ばれた彼らは、国家の政治全般を推し進めました。そんな彼らを指導・監督し、国を実質的に支配していたのが、貴族の会議である元老院です。そして、最後に重要なのが、中小の農民、いわば一般の男性市民（平民）によって構成された民会です。ローマの政治は、貴族による独占的な支配と、それに対抗しようとする平民たちとが争い合いながら、ちょうどいいバランスの中で執り行われてきました。

しかし、このバランスに少しずつ陰りが見えはじめます。そのきっかけの1つが、平民たちの没落です。当時の平民たちの多くは、もともと自分の土地で小規模な農業を営んでいました。しかし、土地の主である平民たちが度重なる征服戦争に駆り出されるうちに、手入れをする人を失った土地が荒れ果てていってしまったのです。

さらに同じ頃には、広大な土地を持った有力者が、奴隷を使って大規模な農業を営むようになっており、これも平民たちに打撃を与えました。基本的に、大抵のことは大規模にやったほうが効率が良くなりますよね。農業も同じで、狭い土地で個人がコツコツとものを育てるよりも、広い土地で多くの人員を動員して育てたほうが、安く大量に収穫できます。このように生み出された農作物が市場に行き渡るようになると、中小農民は太刀打ちできません。こうして、ローマの伝統的なバランスは崩れていきました。各地では、生活に苦しんだ人々や、金持ち・支配者層に不満を持っていた奴隷たちによる反乱が相次ぎ、国内の情勢は不安定になっていったのです。

ローマに現れた2人のカリスマ

混乱したローマはこのまま沈んでいくかに思われましたが、紀元前1世紀に登場した2人のカリスマによって持ち直し、「古代帝国」として栄光の時代を築くことになりました。

1人目のカリスマが、かの有名なカエサルです。彼は、3人の有力者のうちの1人として立ち上がったのち、他の有力者たちを押しのけて単独トップに立ちました。そして、ローマの独裁者として数々の改革を実施し、国家をまとめ上げたのです。しかし、古き良き

ローマ共和政の一角を担っていた元老院の保守的な人々は、カエサルの独裁に対して危機感を抱いていました。その結果、彼は改革の道半ばで暗殺されてしまいます。「ブルートゥス、お前もか」という最期の言葉はあまりに有名ですね。

続いて現れた2人目のカリスマが、オクタウィアヌスという人物でした。ライバルとの政治闘争を経て権力を握った彼は、「カエサルと同じ轍は踏むまい」と思ったのか、あからさまに独裁者として振る舞うのは避けることにしました。むしろ彼は、自分のことを「市民の中の第一人者」と名乗り、「あくまで自分は市民であって、元老院のこともローマ共和政もちゃんと尊重しますよ」という姿勢を取ったのです。ただし、彼が握った権力は、実質的には「皇帝」の名にふさわしいレベルのものだったため、ここからローマは「帝国」と呼ばれるようになります。

中国文明の興った地でも動きあり

当時、ローマと並ぶ強大な勢力がもう1つありました。それが、いわゆる中国周辺、黄河・長江流域に発展した国家です。

この地域に大きな変動が生じたのが、紀元前8世紀から紀元前3世紀にかけての、春秋

戦国時代と呼ばれる時代です。大人気漫画『キングダム』で描かれているのも、この春秋戦国時代の後期です。

なぜこの時代に変化が起こったのでしょうか？　その原因の1つが、農業の発展です。特に戦国時代に入ると、人々の間で鉄製農具が使われるようになりました。例えば、土を耕して畑を作ることを想像してみてください。木製のクワやスキと鉄製の道具、どちらがより効率的に土を耕せると思いますか？　やはり、重さや硬さ、鋭さなどに優れた鉄製のほうが効率が良さそうですよね。実際そのとおりで、鉄製農具を使うようになってからは耕地開発が盛んになっていき、手工業なども発達していきました。

こうした農業の発達は、単に食べ物がたくさん手に入ってよかったね、という程度では終わりませんでした。優秀な道具が手に入ったことで、古い慣習などに縛られずとも、自分やその家族だけで十分な規模の農業を営めるようになったのです。こうして、古い慣習に基づく身分制度や血縁関係に基づくつながりなどが弱まってきて、個人や小家族の単位が重視されるようになってきました。

「始皇帝」が治める帝国が誕生

小さな単位でも十分やっていけるようになったことで、各地の有力者たちも独立していくようになりました。もともとは、周という国の王がトップで、それ以外の有力者たちは王を尊重することが求められていました。しかし、有力者たちは次第に尊大になり、「俺こそが王だ」と自称するようになっていったのです。

このような流れの中で台頭したのが、秦（しん）という国家です。最初は小規模に過ぎず、中国の中でも辺境の地に陣地を構えていた秦でしたが、招き入れた優秀なブレーンが行った改革によって次第に発展していきます。そしてついに、秦を東アジアのトップに引き上げる人物が現れました。それが、後に「始皇帝」と呼ばれる秦王、政（せい）（この一文字が名前）です。

彼は、バラバラに独立していた有力者たちの国を次々に倒し、ついに中国の統一を成し遂げました。そして、今まで名乗っていた「王」を超える「皇帝」を名乗ったのです。こうして、中国にもローマと並ぶ帝国が完成しました。

2つの帝国誕生の経緯は似ている？

さて、ここまで2つの古代帝国が成立するまでの過程をざっくりと見ていきました。こ

の2つには、なにやら似たような流れがあったことにお気づきでしょうか。

古代帝国の基礎となった国は、どちらも最初小さな国（都市国家）から始まりましたが、その後周辺の国を征服していき、最終的には帝国の名にふさわしい規模にまで成長していきました。こうした国家の発展プロセスは、実はこれまでの歴史研究上、「法則」のようなものがあるとして議論されてきたのです。

しかし、細かいところに注目すると、そこには当然ながら多くの違いがあります。帝国が登場するまでに、社会やそこで生きる人々がどう変わっていったのか。帝国統治者の呼び名はどのように登場したのか。これらの違いに注目することなくして、古代帝国を理解することはできません。

これから検討する東大の問題も、まさに両地域の共通点と相違点の双方に注目させる問題となっています。それでは、いよいよ東大世界史の問題に挑戦してみましょう。

演習編

問題（2017年）

「帝国」は、今日において現代世界を分析する言葉として用いられることがある。「古代帝国」はその原型として着目され、各地に成立した「帝国」の類似点をもとに、古代社会の法則的な発展がしばしば議論されてきた。しかしながら、それぞれの地域社会がたどった歴史的展開はひとつの法則の枠組みに収まらず、「帝国」統治者の呼び名が登場する経緯にも大きな違いがある。

以上のことを踏まえて、前2世紀以後のローマ、および春秋時代以後の黄河・長江流域について、「古代帝国」が成立するまでのこれら二地域の社会変化を論じなさい。解答は20行以内で記述し、必ず次の8つの語句を一度は用いて、その語句に下線を付しなさい。 ※1行は30字。

【指定語句】 漢字　私兵　諸侯　宗法　属州　第一人者　同盟市戦争　邑

読解

演習編のはじめに　～東大世界史の第一歩～

ここからの演習編では、実際に出題された東大世界史の第1問、いわゆる「大論述」を使って、世界史をさらに深く学んでいきます。

と、その前に、まずは東大世界史の問題はどんな構成になっているのか、どんな特徴があるのかについて理解しておきましょう。これは本書で扱う10問全てに共通します。

まず、東大世界史の問題文は、ほとんどが2段落または3段落で構成されています。最後の段落に書いてあるのが、「この問題を通して考えてほしいこと」で、本書ではこれを「主要求」と呼ぶことにします。それ以外の段落は「リード文」と言って、主要求を考える前提となる文章です。そして、このリード文にこそ、東大世界史の醍醐味（だいごみ）、東大教授（出題者）の歴史観が詰まっていると言っていいでしょう。

つまり、問題について考えるためには、直接の問いである主要求だけでなく、リード文まで丁寧に読み込む必要があるのです。そうすることで、「東大はこの問題を通してどんな歴史観を提示したいか、どのように考えを巡らせてほしいか」が分かり、解答の筋も自（おの）ず

と決まってきます。「問題文を丁寧に読んでも仕方がない」と思う方もいるかも知れませんが、むしろこの問題文を読み込まないと、せっかく東大世界史を使って勉強する意味がありません。噛めば噛むほど味わい深くなるスルメのようなものだと思って、東大が提示する歴史観の面白さをじっくり体感していきましょう。

「古代帝国」が成立したのはいつなのか？

前置きが長くなりました。いよいよ第1章の本題、「古代帝国」の成立について考えていきます。

まず、今回の問題の軸を定めるべく、主要求を確認しましょう。第2段落には、「『古代帝国』が成立するまでのこれら二地域の社会変化を論じなさい」とあります。二地域とは、講義編でも紹介したローマと黄河・長江流域（現在の中国に相当）のことですから、今回はローマと黄河・長江流域の社会変化について考えればいいと分かります。

ここで、考えるべき対象が「社会」の「変化」であるのには注意が必要です。つまり、政治制度ばかりに着目したり、変化を意識せずにだらだら歴史の流れを想起したりしてはいけないということです。「社会」という言葉は多義的ですが、少なくとも、政治のみなら

ず経済や文化的な側面に注目してこそ見えてくる事実がある、ということが示唆されています。また、「変化」には、変化前の姿・変化した理由・変化後の姿がそれぞれ存在します。もちろん、この3つの要素全てを毎回漏れなく表せるとは限りませんが、自分の考えがちゃんと「変化」になっているかどうかは、常に意識しておきましょう。

そこまで分かったところで、次はいつからいつまでの時代を対象とすればいいか見ていきます。問題文によれば、今回は前2世紀から「古代帝国」が成立するまでを扱うようです。しかし、「前2世紀」は前２００年から前１０１年までを指すとすぐに分かりますが、「『古代帝国』が成立するまで」がいつなのかは、自明ではありませんよね。よって、今回の問題では、「古代帝国がいつ成立したのか」を確定させる必要がありそうです。もっと言えば、そもそも「古代帝国」が何なのかも意識すべきです。何のことか分からないままでは、それがいつ成立したかについても考えようがありませんからね。

「帝国」は「法則的な発展」を遂げてきた？

今回の問題の軸が分かったところで、第1段落、リード文のほうを読んでいくことにしましょう。

リード文の前半では、「帝国」という言葉が現代世界を分析するために用いられることがあり、その原型として「古代帝国」が着目されたこと、「古代社会の法則的な発展」について（歴史学上）盛んに議論されてきたことが語られています。

ここで重要なのが「古代社会の法則的な発展」です。従来の歴史研究で議論されてきた「古代社会の法則的な発展」とはどんなものなのか、押さえておく必要があるでしょう。

もしここで問題が終わっていたら、帝国の法則的な発展について考えればそれで十分だったかもしれません。しかし、一般論や従来の考え方に触れただけでは終わらないことがあるのが東大です。リード文の後半が「しかしながら」で始まっているのも、東大が、今まで必ずしも注目されてこなかった視点に気づかせようとしているからでしょう。

その視点とは、簡単に言えば、「類似点だけ見ていていいんですか？」というものです。従来は、似ている所を見てばかりで、各々に固有の特徴が見過ごされていたのではないか。「法則的な発展」と言える部分もあるものの、そこからはみ出したそれぞれの特徴や、違いにも目を向けるべきではないか。そんな問題意識が、このリード文から見えてくるのです。

統治者の呼び名の登場は、統治の完了、すなわち「帝国」の成立と一致

古代社会の発展、すなわち「それぞれの地域社会がたどった歴史的展開」に目を向けるに当たって、今回東大側が「違い」の例として挙げているのが、『帝国』統治者の呼び名が登場する経緯」です。

そして、この「帝国」統治者の呼び名が登場した瞬間こそ、主要求を読み解いた時に気になっていた「古代帝国がいつ成立したのか」の1つの答えでしょう。つまり、古代帝国の成立時期は、統治下の社会がその人を統治者と認めて名前を与えた時、または統治完了の証として統治者自らその名を名乗った時とほぼ一致するということです。

法則的な発展を理解した上で、そこからはみ出した部分を押さえるべし

これを踏まえると、今回考えるべき「二地域の社会変化」とは、紀元前２００年から統治者の呼び名が登場するまでの、ローマと黄河・長江流域における社会変化のことだと分かります。

その際、「法則的な発展」の概要と、その枠に収まらない二地域それぞれの特徴を意識することが必要です。ここで、「法則的な発展」をどうでもいいものだと考えてはいけませ

ん。法則がどんなものか分かってはじめて、そこからはみ出した部分についても正確に捉えられるようになります。古代社会の法則的な発展は、教科書でも取り上げられる重要事項ですので、しっかり押さえましょう。

解説

都市国家的性格を失っていったローマ

かねてより議論されてきた「法則的発展」とは、大まかには、都市国家→領域国家→帝国というように、国家の性質や形態が成長していくことを指します。都市国家は、ある都市とその周辺部からなる小さな国家のことで、それが強力な1つの国家によって統合されたりすることによって大きくなったのが領域国家です。帝国は、さらに広大な地域を治めるものを指します（山川・新p17、第一p7）。

古代社会の法則的発展

前2世紀以降のローマ、
春秋時代以降の黄河・長江流域
における「古代帝国」が
成立するまでの社会変化

ひとつの法則の枠組に収まらない、
それぞれの地域社会がたどった歴史的展開
例）「帝国」統治者の呼び名の登場経緯

都市国家として一大勢力を築いたローマは、建国以来、周辺地域へと盛んに侵攻し、征服戦争によって勢力を拡大していきました。

しかし、戦争が度重なったことで農地が荒廃する一方、属州では戦争捕虜を奴隷として使役する大規模農場（ラティフンディア）が成功し、属州からの安価な穀物が流入してくるようになりました。こうして、もともと自立できていた中小農民は苦境に立たされていきます。この辺りの話は、講義編でもお伝えしましたね。

こうした状況に危機感を覚え、中小農民たちの地位や生活を取り戻そうとしたのがグラックス兄弟です。彼らは、民主政治の基礎となる市民たち、農民層を再興してローマの伝統を維持・回復しようと、大土地所有を制限するための土地改革を目指します。しかし、こうした動きは大地主などの金持ちや保守的な勢力にとって当然目障りで、グラックス兄は暗殺され、その遺志を引き継ごうとした弟も自殺に追い込まれました。

状況が悪化の一途を辿る中、ついに各地で反乱が起こりはじめます。その代表例が同盟市戦争です。同盟市とは、ローマと個別に同盟関係を結んだ都市のことで、その市民には自治権が与えられたものの、政治参加や免税などの特権（ローマ市民権）は認められていませんでした。この状況に対する不満が爆発したのが、同盟市戦争だったわけです。

この対処に当たったのが、当時有力だった政治家のマリウスやスラたちです。彼らはこの頃激しい政治闘争を繰り広げており、自分の名声を高めるチャンスを狙っていました。そんな中で各地で反乱が起こったため、彼らは「この反乱を鎮めれば、自分たちの評価も上がるだろう」と考えて、反乱の平定に乗り出します。この時活躍したのが、有力者たちが独自に無産市民（土地を失うなどして貧しくなった下層民）を集めて訓練・編成した私兵です。従来のローマで軍隊と言えば、中小農民たちが自分たちで武装した重装歩兵で、これがローマ共和政を支える基盤でもありました。内乱とその平定過程を通じて、ローマの兵制の主体が重装歩兵から私兵へと変わったことに合わせて、共和政の伝統も次第に変容していったのです。

さらに、今後も同盟市戦争のような反発が起こることを恐れたローマは、同盟市にある程度歩み寄ることを決めました。その結果、同盟市民を含む、イタリア半島内の全ての自由民（奴隷や女性以外の人）にローマ市民権が与えられたのです。こうしてイタリア半島内の人々が共通の権利を持つようになったローマは、一都市国家としての性格を失い、領域国家的な存在へと変化しました（山川・新p78）。都市国家から領域国家への変容とは、まさに法則的な発展として議論されてきた話に合致しますね。

カエサルが準備し、オクタウィアヌスが完成させたローマ「帝国」

その後、元老院による伝統的な体制が内乱への有効な対処をできないでいる中で、ローマに2人のカリスマが現れ、「古代帝国」ローマが成立したという話は、講義編でも紹介しました。

まず現れたのがカエサルでしたね。彼は、同じく軍人・政治家であったポンペイウスと、著名な大富豪クラッススと手を組んで、元老院体制を打破しようと画策します。こうして結成されたのが、第1回三頭政治です。しかし、3人は協力体制を継続できず、クラッススの死によって第1回三頭政治は解散します。その後、残ったポンペイウスとの直接対決に勝利したカエサルは独裁権力を確立し、さまざまな改革を行いました。ちなみに、ポンペイウスのもとに進軍するカエサルが、ルビコン川を渡るに際して言ったとされる有名なセリフが、「賽は投げられた」です。

しかし、カエサルによる独裁は長くは続きませんでした。彼は、元老院の伝統を重視しようという姿勢をほとんど示さなかったことから、従来の体制をよしとする保守的な人々から疎まれてしまったのです。最終的に暗殺されてしまった話は、講義編でお伝えしたとおりです。

続いて現れたのがオクタウィアヌスです。カエサルの養子だった彼は、カエサルに仕えていた軍人であるアントニウスとレピドゥスという有力者と協力することを選びます。こうして結成されたのが、第2回三頭政治です。しかし、こちらも第1回と同様に程なくして崩壊してしまいます。オクタウィアヌスとアントニウスの仲を取り持つ「かすがい」的な役割を果たしていたレピドゥスが失脚した後、残る2人が激しく対立します。エジプトを巻き込んだアントニウスとの直接対決に発展したこの対立は、オクタウィアヌスの勝利によって終わり、彼が新たにローマの覇権を独占することになったのです。

このようにして覇権を獲得したオクタウィアヌスは、カエサルの失敗を教訓としていました。つまり、元老院をないがしろにして独裁を強行してはならないということです。彼は、あくまで元老院を尊重する姿勢を示すようにしたことで、事実上の独裁を絶妙なバランス感覚のもとで実現しました。

まず、エジプトを倒して凱旋したオクタウィアヌスに対し、元老院は「尊厳者（アウグストゥス）」という称号を授与しました。ここで彼は国家のさまざまな重要権限を一挙に獲得し、事実上の独裁を開始できるようになったのですが、彼はあくまで「第一人者（プリンケプス）」を自称しました。これは、「元老院の議員名簿の筆頭に記載され、会議で最初

に発言する第一の人物」を意味します。つまり彼は、あくまで元老院という既存の制度の中のトップに過ぎないとアピールしたのです。こうして彼は、余計な反発などを回避しつつ、事実上の帝政を開始しました。尊厳者や第一人者という呼称が登場したこの時こそ、「古代帝国」としてのローマが誕生した瞬間と言えるでしょう。

実力本位の傾向が進み、領域国家が各地に生まれた黄河・長江流域

一方、黄河・長江流域では、農業の発展によって旧来の身分制度や血縁関係が弱まり、個人や少家族の単位が自立するようになってきたと、すでにお伝えしましたね。これについて、もう少し詳しく見ていきましょう。

当時、黄河流域では、鎬京（こうけい）（現在の西安付近）に都を構えた周という王朝が大きな力を持っていました。周は、当時としてはかなり広大だった領土を治めるために、封建制と呼ばれる統治体制を採用します。これは、自分の一族などに土地を与えて諸侯とし、その土地の統治を代々彼らに任せるもので、このようにして形成された都市を「邑（ゆう）」と呼びます。

さらに、当時の社会で封建制を支えたのが、宗法（そうほう）という一種のルールです。父系の親族集団を指す「宗族」の内部で守るべきルールとして宗法を重視し、皆で守り行うことは、

血縁関係（氏を共有するという意味で「氏族」とも言う）に基づく結束を強化する役割を果たしました。

このような伝統的結束が弱まるきっかけになったものの1つこそ、鉄製農具の普及等による農業の発展だったわけです。さらに、この頃には北方からの異民族の侵入が相次ぎ、周は鎬京を捨て、東方の洛邑（らくゆう）（現在の洛陽付近）に遷都してしまいます。周自身も弱体化しつつあったことがわかりますね。

こうした状況の中で、黄河・長江流域では実力本位の傾向が強まっていき、各々が領域国家を形成しはじめました。周をトップとしてその下に集うのをやめ、諸侯たちが自らの力を顕示するようになってきたのです。と言っても、いきなり周王をすっぱりと見限ったわけではありません。周が遷都してすぐからの春秋時代には、諸侯の中でも有力な者たちが「覇者」と名乗ってその力を競いつつ、周王を尊重するという体裁は維持していました。その後、戦国時代と呼ばれる頃になると、周王を無視して有力者自ら「王」を自称し、独自に富国強兵を図るようになっていきます。こうして、黄河・長江流域でも領域国家が形成されていったのです（第一p35）。

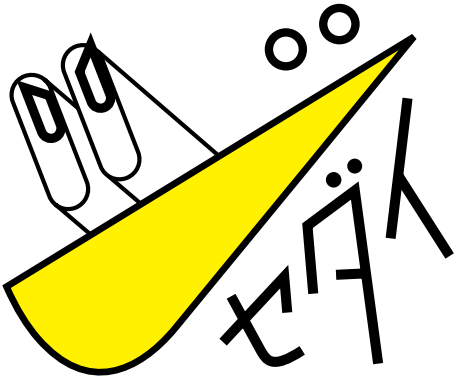
この間、文化的な面でも新しい動きがありました。まずは、漢字が発明され、着実に普

及していったことです。古代中国の殷王朝以来形成されてきた文字である漢字によって、情報を広く後世まで伝えられるようになったことで、多様な風土・言語を持つ諸地域が結び付けられていきました。そして、「中国」という文化的なまとまりが形成されてくるとともに、「中国」の外にいる者たちと自分たちとを区別するような「中華意識」も共有されるようになります。

さらにこの時期には、他にもさまざまな思想が生まれました。実力本位の風潮が強まる中で、自分の領土をよりうまく支配したかった各地の有力者たちが、思想家をブレーンとして迎える例も出てきています。

その代表例が、商鞅（しょうおう）という思想家を招いて国を大きく発展させた秦です。そして、最盛期の秦で王を務めた「政」も、李斯という思想家を宰相として登用し、他の国を併合して古代帝国を成立させました。この時彼は、王を超える存在として、史上初めて「皇帝」を名乗りました。こうして見ると、オクタウィアヌスが旧来の仕組みを尊重する形で「第一人者」を名乗ったのとは、だいぶ経緯が違いますよね。

ここまでの内容をまとめれば、解答は完成です。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!